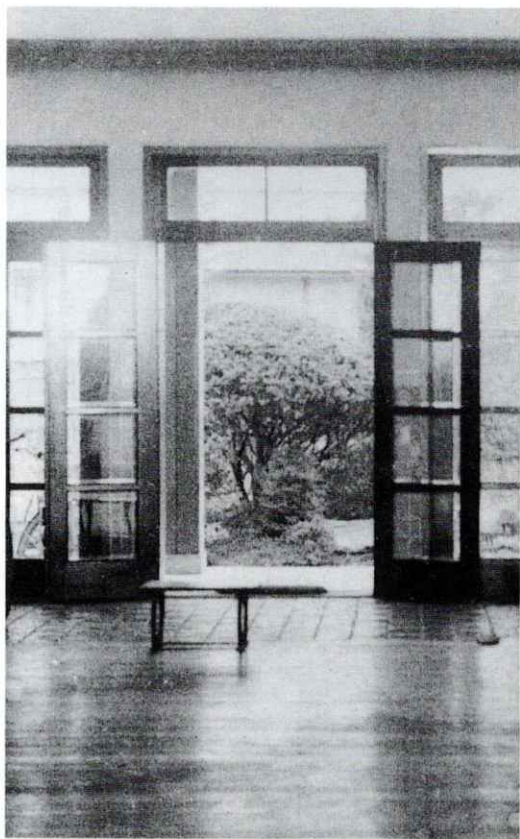


発展期

1932-1944

昭和七・昭和一九



学園主義から規律厳守の学園づくりへ

学園主義を唱え、きわめてユニークな施策をとった鈴木初代校長は、昭和七年四月に本校を辞任した。この年には、三月に満州国の建国が宣言され、五月には五・一五事件によって犬養首相が暗殺されている。原敬内閣以来の政党内閣時代が終わりを告げ、代わって軍の独裁体制が台頭した年でもあった。

本県私立中学の雄として草創期を送り、さらに発展期に入ろうとする岩手中学の前途も、当然のことなが

ら世界史の流れや日本の国情に大きく影響されないわけにはいかなかった。

昭和六年の満州事変以後、戦況は次第に拡大の一途をたどっており、このような国家の非常事態に直面して、創立者・三田義正は時代の要請に即応すべく校風の一大改革の必要を痛感したもののようである。本校の経営母体である岩手奨学会に当初より理事として名を連ねていた著名な軍人・栃内曾次郎海軍大将を第二

代校長として迎えたことがそのあらわれである。

この人事は当時としては時宜を得たものであり、本校関係者は大きな期待を抱いたのであるが、栃内第二代校長は就任式（昭和七年七月八日）の訓辞中に壇上で倒れ、四日後に逝去するという何人も予測するはずもない悲運に見舞われてしまう。

鈴木校長の辞任、栃内校長の急逝と、短い間に二度も学校の中心を失った昭和七年は、まさに「校難」の年であった。

世界恐慌の荒波をまともにかぶった折からの深刻な不況で県内の銀行にも倒産や整理の混乱が生じ、生徒が入学以来積み立てていた報恩旅行（修学旅行）のための貯金までふいになる不幸も重なった。

さらに試験における不正行為とそれに対する自治会としての制裁、自治会役員の処分、処分を不満とする五年生の同盟休校、学校側の処分撤回といった一連の事件が発生し、学園は騒然とした空気に包まれた。

翌昭和八年、佐々木哲郎第三代校長が着任。創立者の意を体して、佐々木校長は校風の一大改革に着手した。そのねらいは規律ある学園づくりの推進であり、諸規律を厳守させたため落第者が急増した。ほどなく岩手中学校は一条乱れぬ団体行動の見事さで名を知られるようになる。その好例が軍事教練で、県下一の成績が認められ、ついに秩父宮来臨の栄に輝くことにな

るのである。職員・生徒一丸となって準備を整え迎えた昭和一〇年一月七日の台臨の日の緊張と感激は、長く語り継がれている。

秩父宮来臨の感激も醒めやらぬ同年二月三十一日、創立者・三田義正翁逝去。享年七五歳の大往生は、まさに巨星墜つのがあった。

翌昭和十一年、二・二六事件が起きて軍の独裁体制が確立、以後国内は戦時色をますます強めていくが、本校では昭和十三年に待望久しかった新校舎を現在地に完成させた。しかし、せっかくの新校舎での教育も、初代校長以来の教育理念が閉塞され、徹底した軍国主義教育に変わっていった。昭和一六年一〇月には岩手中学報国隊が編成され、軍隊式の命令系統ができた。そして一二月八日、日本は太平洋戦争に突入する。

やがて卒業生の戦死者が増え、教師にも召集令状が来るようになる。生徒の勤労奉仕も強化された。昭和一九年からは学徒動員のため高学年の授業ができなくなり学園に文字通りの暗黒時代が到来したのであった。

